

無言の静寂の中で私を探しなさい

シュリ・サンジャイ・マハーリンガム

プラシャーンティ・ニラヤムのダシャラー祭は、『バガヴァッドギター』の中で明確に述べられているように、あらゆる主要な神への道の融合した表明です。ヤグニヤ(供儀)や関連する儀式はバクティ・マルガ(礼拝の道)を象徴しており、学校や大学の学生らによって行われるグラマ・セヴァ[村への奉仕]はカルマ・マルガ(行動の道)の試みであり、毎夕の啓発的なスピーチやさまざまな聖典の展示は、人をグニャーナ・マルガ(英知の道)へと駆り立てます。以下は、2014年9月27日にサイクルワント・ホールで行われた、そのようなスピーチの記録の1つです。

サンジャイ・マハーリンガム博士は、2002年から2008年の間にシュリ・サティヤ・サイ大学で経営学の修士号(MBA)と哲学の博士号を取得しました。それ以来、彼はプラシャーンティ・ニラヤムの大学キャンパスで、経営学と商学部の教職員として奉仕しています。

私たちの最愛のバガヴァンの聖なる蓮華の御足に、最大の愛を込めてご挨拶申し上げます。この上なく寛大で、愛にあふれ、最も慈悲深い主、神聖原理そのものであるお方、唯一無二であるお方、本質的に時間を超越し、理由がなく、無形であるお方が、制限という衣と姿を身にまとわれたおかげで、私たち人間は、制限されたお方を通して無限なるお方を心の中でちらりと垣間見ることができます。

ここにいる私たち全員のハートの中で光り輝くお方、今、活動的に、ダイナミックに、千の太陽の光に心ときめいて、聖なる母よ、聖なる父よ、聖なるグルよ、聖なる保護者よ、私たちの靈感の源であり、何よりも私たちのヒーロー[英雄]であり、神聖な実在であるお方よ。あなたの蓮華の御足に、私は終わりのない、無限の、無数のご挨拶の祈りを捧げます。

また本日、このホールにおいでになったすべての皆様の御足に、愛と尊敬を込めて、私のご挨拶を捧げます。

英知は常に内側から開花します。外側の出来事はせいぜい可能性と助言になり得るだけです。実際、私たちの聖典は広い範囲に及んで、述べています。「シャブダジャーラム マハーランヤム チッタ ブラマナ カーラナム」[『ヴィヴェーカチューダーマニ』60節] これを訳すと「言葉はうっそうと生い茂る深い森のようであり、意識の散漫と妄想に第一の責任がある」という意味です。こう述べたからには、もうあとに引けません。



問題の解決方法は問題を削除すること

この機会に2～3の体験と、そこから私が学んだことをシェアしたいと思います。体験は小さなものかもしれませんが、私にとっては人生において非常に靈妙で深遠な体験であり、それらは私の意識に、永遠に続く印象を残してくれました。

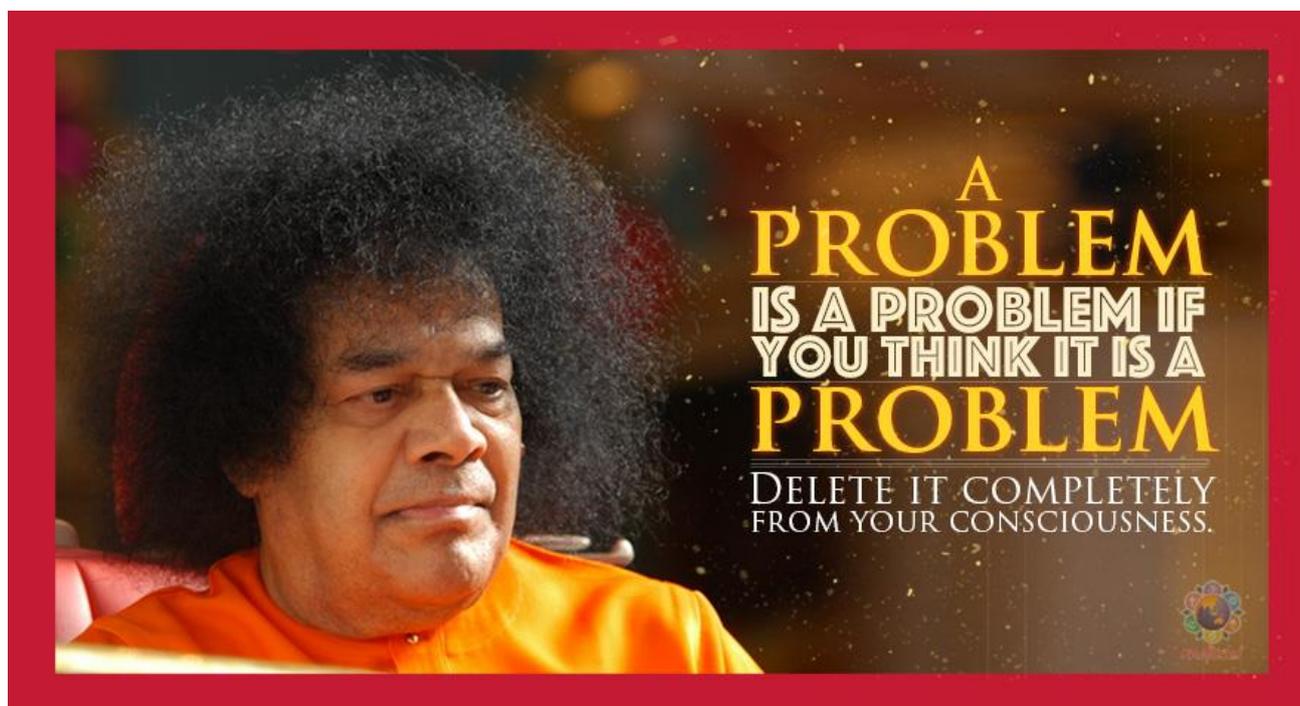
それは2010年9月のことで、私は博士課程を修了したばかりでした。こう申し上げては何ですが、当時、私はかなり切迫した生計で暮らしていました。月に5,000ルピーから6,000ルピー(2010年:1ルピー=約2円)で暮らしを立てていたのです。プッタパルティで品位を保って生活するにはそれで十分でした。その月の初めに思いもよらぬ出費がありました。それは9月4日のことで、私の口座にはもう2,000ルピーしか残っていませんでした。それでその月を暮らしていかねばならず、残り26日間を2,000ルピーで暮らすのはとても不安でした。どうやってやりくりすれば良いのでしょうか？

夜の祈りの時間でした。そこで私は顔を洗い、祭壇の前に座りました。心は乱れていました。心の中に怒りと恨みの気持ちがあり、皆さんも同意されると思いますが、内なる神とつながろうとするなら、それは入るのに最善の場所ではありません。ですから、私はただ自分の内なる心の状態をそのままバガヴァンに捧げ、こう申し上げました。「スワミ、これが私の状態です。あ

あなたは至高の光です。私はあなたに自分の問題を捧げます。どうぞ御心のままになさってください。」

バガヴァンが慈悲深い主であるというのは私の確認済みの体験であり、もし私たちが心の底からバガヴァンに何かを祈り求めるなら、バガヴァンは常に、常に、常に、答えて下さいます。例外などありません！祈りの後、座っていると、私は自分の心が本当に落ち着いてきたことがわかりました。心はとても静かになり、その静けさの中で、私の意識の中にバガヴァンの元に来るずっと前に受けたあるインタビューが思い浮かびました。

そのインタビューでバガヴァンは私にあることをおっしゃったのですが、それが心の中にくり返し浮かんだのです。その言葉を訳すと、次のようになります。バガヴァンはおっしゃいました。「問題は、君がそれを問題だと思うなら問題だ。君の意識からそれを完全に削除しなさい。そうすれば残るのは純粹意識だけになり、問題が何であれ純粹意識は常に[解決の]方法を見つけるだろう。」



このようなことを思い出しながら私は座っていました。私はバガヴァンとつながる素晴らしい時間を持ち、本当に幸せな気持ちで、神の力に触れ、癒され、愛され、喜びの涙で抱きしめられて立ち上がりました。私はすべての状況を完全に忘れてしまいました。その夜、私は子供のように眠りました。聖なる母の腕に抱かれた子供に、どんな心配があるのでしょうか？

翌朝、私は起き上がりました。私は口座の残高を示す ATM の伝票を持っていました。私の残高は 2,000 ルピーでした。冗談のつもりで、私はペンを取ってゼロを1つ増やし、20,000

ルピーにしました。私は思いました。「これで十分だろう。今月はこれでやりくりしよう。さあ、どうなるか見ていよう。」

その日の昼間、突然、戸棚をきれいにしたいという抑えがたい衝動を感じました。その前に、少し話が逸れることをお許してください。聖なる母であるバガヴァンは、時おりご自分の子供たちに最高の祝福として、いくらかお金をくださいます。バガヴァンと共にあればすべては深遠です。世俗的なものはありません。スワミはかくも偉大な神聖なグルであるがゆえ、スワミがなさることは何であれ、多くの次元において、多くの深遠な意味があるのです。私たちは認識していないかもしれませんが、スワミは決して世俗的なことはなさいません。ですから、至高の祝福として、スワミは時おりお金をくださることがあったのです。

2007年のある行事の時、バガヴァンは私にお金を下さり、こうおっしゃいました。「それを戸棚にしまっておきなさい。」私は「わかりました、スワミ。」と答えました。スワミはお尋ねになりました。「それをどこにしまうつもりだね？」そしておっしゃいました。「君のあらゆる持ち物の下にしまっておきなさい。」私は、そうすればお金は安全だ、とスワミはおっしゃっているのだらうと思いました。

スワミは私の考えを読み取って、おっしゃいました。「**ノー、ノー、ノー、安全のためではありません。それは、お金が人生においてまったく重要でないことを、君がいつも覚えておくためです。だから、お金はあらゆるものの下、棚の一番底にしまっておくのです。意識が一番上です。神が最も重要です。お金は重要度が一番少ないのです。君の意識の中で、お金に重みを与えてはいけません。裕福であろうと貧乏であろうと、どちらにせよお金を君の意識の中で重くしてはいけません。それを忘れないために、お金は君の戸棚の一番下にしまっておくのです。**」これは長年、私の習慣になってしまいました。

9月5日に、私は戸棚を掃除していました。いつもと違って、あらゆる持ち物を取り出しました。すると、戸棚の暗くてよく見えない片隅に、しわくちゃの封筒がありました。私はその封筒を開けて、中にお金が入っているのを見つけました。お金を取り出して数え始めましたが、最後の紙幣でぴったり18,000ルピーありました。私はATMの伝票に20,000ルピーと書いていました！ ああ！ 私は思いました。「あのATMの伝票にもう1つか2つゼロを付けておけばよかった！でも、今はゼロ1つでもやりくりできる。」そのお金がどこからきたのか手掛かりはなかったのですが、現れるはずがないことは確かでした。ですから、私は座ってよく考えました。頭を働かせなくてはなりません。そして、遂に思い出しました。1年半ほど前、いくらかの貯蓄を清算する前に、お金を銀行に預ける代わりに、不可解な理由で、私は習慣として戸棚のあらゆる衣類の真下にそれをしまっていたのです。

この話の要点は、私たちが必要とするものはいつでも、バガヴァンにその必要を申し出るなら、このようにバガヴァンが駆けつけ、すべての問題を解決して下さるということです。なぜな

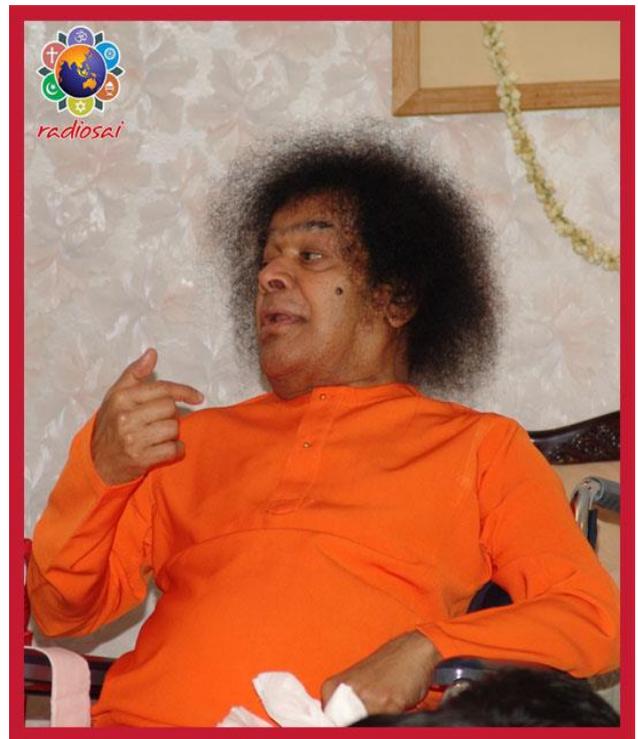
ら、この後、私は何度も自分の戸棚の奥まで見てみましたが、1 ルピーも発見できなかったからです！

この話の重要な点は、私たちが神に介入することを許せば、神が奇跡を起こして下さるということです。神のエネルギーが私たちの中を流れることを許すなら、驚くべきことが起こり得ます。それらはいつでも起こりますが、私たちがそれを妨害しているのです。私たちは、無数の過去世の中で築き上げてきた困難や心配事、思考や思考構造やエゴの殿堂に、驚くべき神の愛が流れ込むことを阻んでいるのです！

内側に耳を傾け、栄光に満ちた生活を送りなさい

私が学び、ハートの中に刻み込んだ第2の教訓は、何がやってこようと、周りで何が起ころうと、常に自分を穏やかで、平安で、喜びに満ちた状態に保つ方法はある、ということです。それは努力を要しますが、可能なことであり、でき得ることです。スワミはその方法を示して下さいました。必要なのは、知覚における靈妙な転換だけです。

あるインタビューで、バガヴァンは私におっしゃいました。「人は、無知が終わり、英知が始まると思っています。そのようなことはありません。始まりも終わりもないのです。英知は無限であり、永遠であり、終わりがありません。無知も終わりがなく、永遠であり、不滅です。その2つは2本の線路のように、常に互いに平行に走っています。終わりも始まりもありません。ただどの線路に飛び乗りたいかは、あなたの選択です。あなたは無知の線路に飛び乗って、みじめな人生を送ることであれば、英知の線路に飛び乗って、喜びの人生、何より自由〔解脱〕を選ぶこともできるのです。」



次の出来事は 2007 年頃に起こりました。私は個人的な用事で1日ベンガルール(バンガロール)へ行かなければなりませんでした。大したことなく、ちょっとした用事だったのです。日曜の朝に出かけ、その日の夕方には帰ってくる予定でした。私たちはあらゆる自分の行動をいつもバガヴァンにお知らせする機会があったので、ある日私は手紙を書いて座っていました。バガヴァンが来られ、私の手紙を受け取って下さいました。私は言いました。「スワミ、この日曜日に私はベンガルールに行かなくてはなりません。もしスワミにお許しいただければ、私は行ってまた帰ってきます。」

スワミはおっしゃいました。「よろしい、行ってまた帰ってきなさい。」そこで、私は切符を予約してベンガルールで会わなくてははいけない人と約束をしました。準備は万端でした。大したことではなかったのです。私がベンガルールに行くのは初めてではなく、最後でもありませんでした。本当に些細なことで、わくわくすることでもなければ、イライラすることでもありませんでした。しかし、なぜかその日が近づくにつれて、私はとても居心地の悪いものを感じるようになりました。理由はわかりません。私はただその気持ちを払いのけて、思いました。「スワミが私に行く許可を与えて下さったのだから、行かなくてはならないんだ。」私は朝5時半のバスでベンガルールに向かいました。その前夜、寮で眠ろうとしましたが、とても不愉快な気持ちになりました。あまりにも不愉快だったので、ものすごく息苦しくなり、窒息死しそうでした。

ベンガルールに行くことを考えるたびに、私の中の何かがその考えに抵抗しました。それは些細なことであり、1日だけのことだったので、私はこの振る舞いの道理や理由を突き止めることができずでした。用事を終えて、帰って来なければならなかっただけです。しかし、何が起こっていたのでしょうか？ 私はただ自分が1日ベンガルールに行かなければならないという事実を、受け入れることができなかつたのです。

私は一晩中葛藤して、遂にすべてを脇へ押しつけ、翌朝ベンガルールへ向かいました。私は平穩無事な旅をしました。すべては計画どおりでした。仕事は終わり、私は帰ってきました。3日後、私はバガヴァンとインタビュールームに入る機会がありました。バガヴァンはお尋ねになりました。「エミ サマチャラム？(何か変わったことはありましたか?)」

私は言いました。「スワミ、私は日曜日にベンガルールに行って、これこれをしました。誰それに会いました。」スワミはおっしゃいました。「君はベンガルールに行ったのかね？ 私は君に行かないように言いましたよ。」私は押し黙り、心の中で思いました。「何ですって？ 僕はあなたにお手紙を渡し、あなたは行って帰ってくるよう僕に言われたではありませんか？」スワミはおっしゃいました。「私は君に、はっきりと行かないように言いました。」私は敬意を表して服従しました。「スワミ、お許してください。私はあなたにお手紙を渡し、あなたが『行ってまた帰ってきなさい。』とおっしゃるのを聞きました。」スワミはおっしゃいました。「アディ チュンマ(からかっただけです。) あの前夜、君が出発する前、私は何度も君のところに行って、行かないようにと言いました。君は行きました。あれはテストだったのです。0点です。不合格です。」

私は深く落胆し、傷つきました。スワミが「不合格」とおっしゃったのはとても傷つきましたが、洞察に満ちた一つの体験に恵まれたことに感謝しました。レッスン(知恵)は習得されました！私たちが内なるスワミにつながろうとすることは、第一に、根本的に重要なことなのです。辞書にある「スピリチュアル(霊的)」という言葉の意味は、「スピリット(魂・霊)に関するもの、スピリットに属するもの」となっています。バガヴァンとの内なるつながりを築いた時、初めて私たちは「スピリチュアル」であると言えます。実際、すべてのサーダナの目的は、それ以外にありません。

何をするにせよ、ジャパムであれ、ディヤーナ(坐禅・瞑想)であれ、セヴァ(奉仕)であれ、グラマセヴァ(村への奉仕)であれ、サイ文献の学習であれ、私たちの行うあらゆることの目的はただ一つ、内なる神と強固なつながりを築くことです。それはとても重要なことで、私たちの内なる生活のこの面の重要性は、いくら強調してもしすぎることはありません。この内なるバガヴァンとのつながりを深めるなら、私たちは生き生きと輝きます。そうでないなら、ただの歩く屍(しかばね)です。



最近、私たちは40名ほどの仲間で、休暇中にヒマラヤへ行きました。そこには、ある偉大な聖者に捧げられた非常に美しい寺院がありました。それは美しい寺院でした。私たちは全員、その寺院にお参りして、そこに座って瞑想しました。

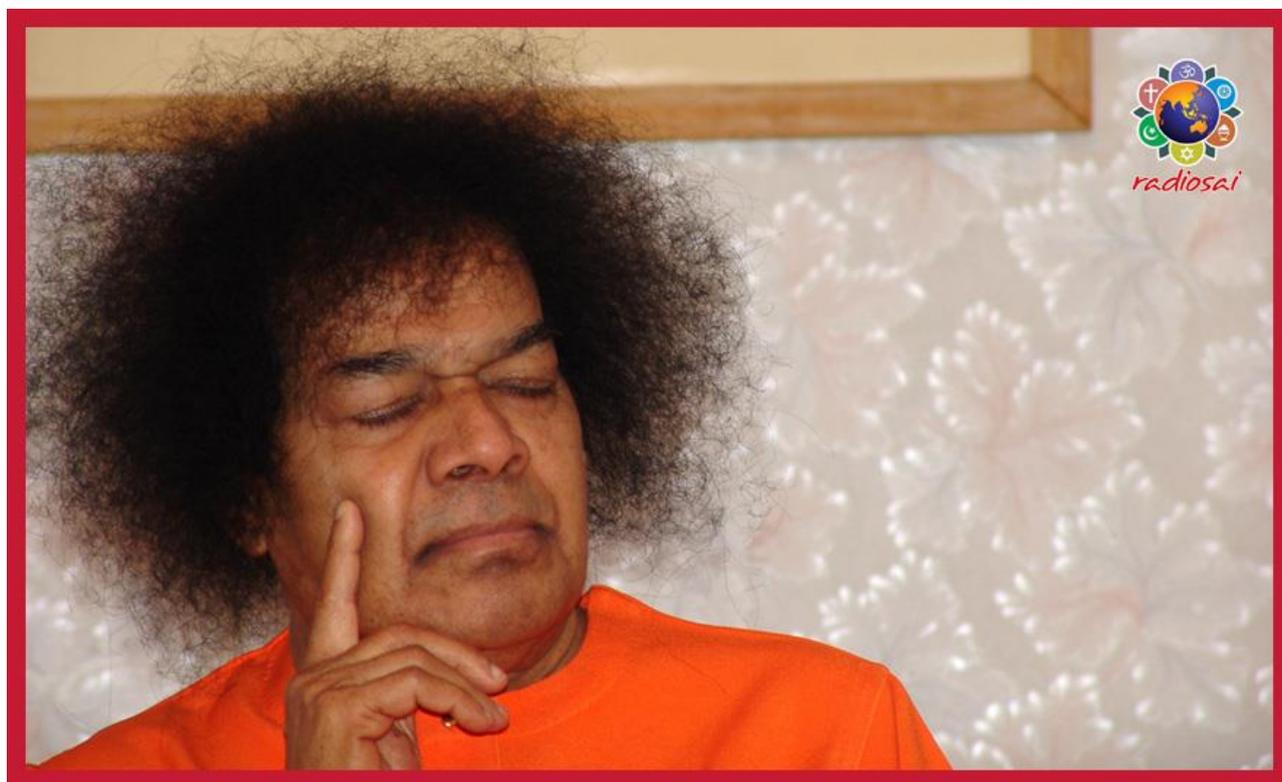
一人の仲間がやって来て、とても素晴らしい体験談を語ってくれました。それは彼がその寺院で味わった、とても崇高で、霊妙で、深遠な体験でした。彼が来て私に話してくれたことを引用します。ある朝、5時にその兄弟が寺院へ行くと、ちょうど寺院の扉が開いたばかりで、彼は中に入って瞑想のために座りました。すぐに心(マインド)は静まりました。彼はこれまで一度も、それほど強烈な女神のご臨在を感じる寺院を見たことはなかったそうです。それは、生き生きした、ドキドキするような、強烈な臨在感でした。それは実に驚くべき、とてつもない臨在感だったそうです。

ですから、この兄弟はそこに座って、目を閉じて、深い瞑想の境地と呼ばれる状態に入りました。完全にすべてを忘れてそこに座っていたのです。目を開けた時、20分か25分過ぎたと思

ったのですが、なんと3時間半も過ぎてしまっていました！ほとんどバスが出発する時刻でした。私たちには次のスケジュールがあったからです。

彼は女神の聖なる光にとても感動しました。彼は、聖なる母が私たちみんな、彼女の子どもたち全員に対して抱いているうっとりするような喜びあふれる愛に心を揺さぶられ、わくわくし、抱きしめられ、一言も発することができませんでした。唇を動かすことさえできませんでした。彼にできたのは、そこに座って喜びの涙を流すことだけだったのです。その完全な静寂の中で、彼がただ「母よ！母よ！」とだけ言うと、ハートの中から、美しく柔らかい、母のような優しい女性の声が聞こえてきました。その声はこう言いました。「**無言の静寂の中で、私を探なさい！**」これは、その女神がおっしゃった、そのままの言葉です。

姉妹の皆さん、兄弟の皆さん、年長者の皆さん、私たちのサーダナのすべては、ただ心(マインド)を沈黙させるためにのみあります。心が静かになれば、私たちは何かとても美しい、自分の奥深くにあるものにつながり、それにつながると怖れも緊張もなくなってしまいます。私たちは皆、アシュラムに住んでいると言います。「アシュラム」という言葉を厳密に訳すと、緊張のない場所、ほとんど努力を要しない性質が支配する場所、という意味です。ストレスがなく、シュラム[努力]がありません。もし緊張やストレスがあるなら、それはアシュラムではなく、シュラムです。真のアシュラムは私たちの内にあり、緊張やストレスではなく、安らぎだけがある意識の境地です。それは、努力を要しない神の安らぎです。



バガヴァンのような素晴らしいお方に巡り会い、バガヴァンに触れ、バガヴァンと会話を交わし、バガヴァンの御言葉や人生やメッセージ、彼の愛に導かれたのですから、人生は、私たちに霊的意識を高めるよう呼びかけています。それは選択ではなく、しなければならない義務なのです。バガヴァンはかつて、トライー・布林ダーヴァン〔ホワイトフィールドのアシュラム〕でこうおっしゃいました。「学生たちよ、君たちには2つの選択肢しかありません。君のハートに私を入らせるか、私が君のハートをこじ開けて中に入るか、どちらかです！」

私はバガヴァンにお祈りいたします。神聖な愛、サイの愛、サイのご臨在という美しい宝石を見つけるために、どうか私たち全員が、唇を閉じて、ハートを開き、マインド(心)を沈黙させ、自らの内に深く潜り込むためのすべての力をお授けください。ありがとうございました。

ジェイ サイ ラム

出典:

http://media.radiosai.org/journals/vol_14/01OCT16/Seek-Me-in-Wordless-Silence-by-Sanjay-Mahalingam.htm